今週の
倫理

2023.4.1～4.7

4月のテーマ ｜ 一貫不怠

1327号

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一―一九九九）のことばを掲載いたします。

小我のよどみ

丸山竹秋

春になって日ましに暖かくなると、新入社員を迎えて職場も活気づいてくる。だがそうした活気や生気のかげに、一種のよどみが時として見られるのだ。

（1）「そんな仕事（学科）、おれにはむかないよ」

（2）「そりゃ、ぼくの性格にあってないよ」

（3）「あたしは、したくない、そんなこと。だってあたしの性質にむかないもの」

そのよどみの中にある声は、ざっとこうしたものである。

（1）の、ある仕事（学科）が自分にむくか、むかないか。これはうちこんでやってみなければ分からないのがほんとうだ。やってみると、あんがいにできることがある。たとえばそろばんができないのに、今すぐやれといわれてもそれは無理である。しかし、むくか、むかないかは、今できる、できないということとはちがう。今できなくても、やっておればできるようになって、自分にむいていると思えるようになる仕事は、いくつもあるのである。

（2）も（3）も、内容的には同じようなものだが、性格とか性質といっているところに、わずかにニュアンスのちがいがある。ただ「これは自分の性格にあわぬ」などという場合、よほどの根拠がないと誤るおそれがあるのである。なぜなら自分の性格とは、いったい何なのか。何と何と何が自分の性格なのか。そうしたところがはっきりしていなくては、あわぬなどということはいえないからだ。

じつは性格とか性質とかいってもひじょうにむずかしい意味をもっていて、学問的にもまだはっきりしてはいない。いずれにしても自分の性質とか性格などというものは、なかなかわかりにくいもので、時には一生かかってもわからずじまいになることがあるくらいだ。頼まれた仕事にたいし、よほどの根拠がないかぎりは、性格や性質にあわないなどと一方的にことわらずに、やれるだけやってみる気概をもつことだ。中年以上になると、自分にできるか、できないかは見当がつくが、若いうちはいろいろなことを勉強させてもらおうと前進すべきである。

学校に入ると、好きな学科、嫌いな学科といろいろあっても、好き嫌いにこだわっていたら、それにこだわってなまけていたら、卒業さえむずかしくなる。まして仕事については、好き嫌いなど言ってはおれないのだ。生きるためには嫌いな仕事でもやらなくてはならない。けれども、生きるためという切ない目的を越えて、人間としての幅を大きくする意味からも、できるかできないか、性格や性質にあうかあわないかは後のこととして、まず何でもやらせて貰うという度量が必要なのである。

（『いかに乗りきるか』より）

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局